

PETRONAS SYNTIUM TEAM

PETRONAS SYNTIUM TEAM REPORT

スーパー耐久シリーズ2008
第7戦「もてぎスーパー耐久500km」
2008年11月15日

■予選:11月15日 天候:曇り

最終戦を迎えた今シーズンのスーパー耐久シリーズ。PETRONAS SYNTIUMチームは、先の第6戦・菅生で28号車がシリーズチャンピオンを獲得したが、50号車がランキング2位を目指す戦いを迎えることになる。加えて、ジョハン・アズミがついに28号車をドライブ、また50号車には吉田広樹もCDрайバーとして参戦。チームは合計6選手が勢ぞろいする形で有終の美を飾るべく、まずは金曜日の練習走行に取り組んだ。

また、今回のもてぎ戦は、土曜日に予選と決勝を行う「ワンデーレース」にて開催。翌日には「スーパースピードウェイ」と呼ばれる国内唯一のオーバルコースを使用したスペシャルレースが行われるため、レースウィークはいつになく忙しい時間が流れた。

土曜は午前8時10分に予選がスタート。2台のPETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEが真っ先にコースへ向かい、アタックを開始する。28号車のADрайバー、谷口信輝はアタック3周目にベストタイムとなる1分57秒776をマーク。トップに躍り出た。一方、50号車のF・ハイルマンはしり上がりりにペースアップし、前日の自己ベストを更新する1分58秒443のタイムで3番手につけた。

その30分後、Bドライバーによる予選が始まり、28号車の片岡龍也がすぐさまアタックを開始する。小気味よくタイムアップした片岡のベストタイムは1分57秒502。ポールポジションを確信した片岡はこれでアタックを終了した。50号車のアタッカー、柳田真孝はいつもどおりタイミングをずらして遅めのコースイン。着実にタイムアップを果たしたのだが、ベストトラップで走行中、前車に引っかかることになり惜しくもタイムロス。1分57秒763のタイムが自己ベストとなった。これにより、A、B両ドライバーの合算タイムによる予選結果として、PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台が揃ってフロントローを独占。今季3度目のベストリザルトを得ることとなった。

なお、A、Bドライバーによる予選のあと、CDрайバーのタイムアタックが行われた。20分間のセッションでPETRONAS SYNTIUMチームは、J・アズミと吉田広樹が揃ってコースイン。タイムアタックはもちろんのこと、レース中のドライバ交代をシミュレートしたピット作業を行い、決勝に向けての準備を進めた。

■決勝 天候:曇り 気温17°C(午後正午時現在)

CDрайバーの予選終了後、ほどなくして始まったピットワーク。チームピット前にはドライバとの記念撮影やサインをもらおうと多くのお客さんがつめかけ、にぎやかな雰囲気にも包まれた。その一方で、もてぎの上空は依然として曇天模様。そんな中、午前11時55分に105周の戦いがスタートすることとなった。

今回、PETRONAS SYNTIUMチームでは50号車のスタートドライバを柳田からハイルマンへと変更。スタート前、ハイルマンはやや緊張の面持ちだったが、一旦レースが始まると落ち着いて周回を重ね、トップ・28号車の谷口に追従するように走行を続けていく。

金曜の練習走行時点から安定した速さを見せる28号車。その快調さは決勝でも変わらず、力強い走りで次第に50号車をも引き離していく。ハイルマンもミスなくベストを尽くしながら2位をキープ、37周終了時点でピットインを迎えた。

ドライバ交代、タイヤ交換、給油とひと通りのルーティンワークを済ませてコースに向かったのは、柳田。その1周後には、トップの28号車がピットイン。こちらは片岡にスイッチし、ピットを離れた。

ドライバ交代後もPETRONAS SYNTIUMチームの2台は、ペースを変えることなく順調にレースを消化。もはや“我が道をいく”展開となっていたが、その中で、それぞれのドライバは互いを意識しているのか、似通ったタイムをマークしながら静かなる戦いを続けているように見えた。

そして迎えた2度目のルーティンワーク。先にピットへ向かったのは、28号車。給油、タイヤ交換は済ませたが、ドライバは交代せず。片岡がチェッカーを目指すこととなった。これに対し、1周後にピットインした50号車は、吉田広樹へとスイッチ。トップ28号車にどこまで詰め寄ることができるのか、その力量に期待がかかった。

PETRONAS SYNTIUM TEAM

片岡のままコースに復帰した28号車に対し、50号車はドライバー交代を行ったため、ルーティンワークを終えたばかりの2台には、50秒強の差が。ともにラップタイムこそ遜色はないのだが、ラップダウンの車両をパスしながら一度開いた差を詰めていくとなるのは難しい状態だった。しかし、終盤に入り、チームは大量のマージンを築いた28号車に対して新たな戦略を立てる。今回、金曜から練習を重ねてきたJ・アズミの投入を決断、ラスト5周での交代を遂行する。100周終了で片岡がピットイン。待ち構えるアズミは緊張の面持ち。慌しくドライバー交代を済ませてコースへ復帰した28号車だったが、慣れない作業で大幅な時間を費やすことになり、その結果、50号車が先行した形でレースは大詰めを迎えた。

ともに重責を負う中、そのプレッシャーをはねのけるかのように丁寧な走りを見せたPETRONAS SYNTIUM チームの2台。結局そのまま50号車がトップでチェッカーを受け今季3勝目をマーク、28号車が2位に続いた。なお、今回の優勝により50号車のシリーズランキング2位が決定。PETRONAS SYNTIUMチームは参戦2年目にして、ランキング1-2位を獲得することに成功した。

●鈴木哲雄監督

無事に1-2フィニッシュを達成できました。今日のレースでは28号車が先にどれだけリードを築けるかによって、アズミの投入が可能か様子を見ることにしていました。谷口と片岡の頑張りによってそれが実現できたわけですが、50号車も最終的には吉田が乗ることになり、最終戦でチームドライバー全員が仕事をできて良かったと思います。今シーズンは2台体制になり、大変なこともありましたが、戦闘力が強化されていいレースができました。

●No.50 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

柳田真孝

今回は、総体的に28号車のほうがいい流れを築いていたのですが、最終的に終盤のピット作業で逆転を果たし、勝つことができました。レースウィークを通してクルマはブレーキに厳しく、丁寧な走りを心がける必要がありました。そういう条件の中でコンスタントな走りをすることができました。また、参戦2年目にして、シリーズランキングでワン・ツーを獲得することができて、良かったと思います。

ファリーク・ハイルマン

今回はスタートドライバーを担当したので、レース前は相当緊張しました。スタート直後は大混乱するので、その中でペースをつかむのは難しかったですね。その点、谷口選手はうまくレースをリードしていたので、後ろからその様子を見て、多くのことを学ぶことができました。日本で2年目のシーズンはさらに勉強を積み重ねることができました。来年も引き続き、このレースで学びたいという思いでいっぱいです。

吉田広樹

レースの展開によって、最後のステイントで乗るチャンスがあると聞いていたので、そのチャンスが巡ってきて欲しいと思っていました。交代後は、勢いあまり、コースをはみ出してしまうこともありましたが、プッシュしたい気持ちとクルマを丁寧にうまくコントロールしなければいけない気持ちがあって難しかったです。勝って良かったと思います。

●No.28 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

谷口信輝

レースはどんな展開になるのか最後までわからないので、いつどのタイミングでジョハンに乗ってもらうのがいいのか難しかったですね。結果的に担当周回数が短くなったため、フレッシュタイヤでいくには気温や路面のコンディションを考えるとツライと考え、片岡が走ったタイヤのままジョハンに乗ってもらうことにしました。ただ、思いのほかピット作業に時間がかかってしまいました。今シーズンは、チャンピオン獲得に貢献できて本当に良かったと思います。

片岡龍也

最終的にアズミを投入するためにも、谷口さんとともにできるだけ多くのマージンを築こうと、フルにプッシュしていきました。結果、ブレーキが途中からキツくなってしまったものの、その反面で大きなマージンを作れたとも思います。慣れていないピットストップで時間がかかったのは残念ですが、ほぼ1シーズンのあいだ乗りたい気持ちをこらえていたジョハンにとっては、今日のレースがこれからの糧になればと思います。

ジョハン・アズミ

今回は、初めてCDライバーとしての予選に出走しました。金曜からサーキットを走ってきましたが、予選そのものは落ち着いて走ることができました。決勝では、谷口さんと片岡さんがどれだけマージンを作って戻ってくるかによって僕が乗るかどうかわからなかったのですが、一番緊張したのは、乗る直前でした。クルマに乗ってからはもうただひたすら走るだけでした。